

## 2. 研究の詳細

プロジェクト名	「音楽アウトリーチ」による地域学校現場との互惠関係の構築		
プロジェクト期間	平成 26 年度		
申請代表者 (所属講座等)	原 尚志 (音楽教育講座)	共同研究者 (所属講座等)	木村 次宏 (音楽教育講座) 山中 和佳子 (音楽教育講座)
<p>1. 研究の背景と目的研究の目的</p> <p>本研究は、本学学生及び教員による地域の学校現場における音楽のアウトリーチ活動を通して、児童生徒の音楽経験の拡充・深化を目指すとともに、本学学生の教育的思考を基盤とした音楽教育実践力を育成することを目的とする。</p> <p>アウトリーチ (outreach) とは、もともと「手を伸ばすこと、地域社会への奉仕活動・出張サービス」という意味である。芸術分野では、1990 年頃から「アウトリーチ」という言葉が用いられるようになった。この「アウトリーチ」とは、日頃芸術に直接触れる機会の少ない住民や子どもたち等に対して、芸術家や団体が地域の文化施設や学校で芸術を体験できる機会を提供する活動という意味を含んでいる。また、文部科学省による平成 17 年度学術分科会資料では、アウトリーチ活動が「国民の研究活動・科学技術への振興への興味や関心を高め、研究者自身が国民一般に対して行う双方向的なコミュニケーション」と定義づけられている。</p> <p>本研究に取り組むことによって、児童生徒の豊かな人間性や感性の育成と地域に根差した芸術文化の発展を支えるための手立て、及び地方の地域や学校の実態あるいは要望に応じた音楽活動の特質を探ることができると同時に、実践を通じて育成される学生の音楽教育実践力を検討することができる。またこれらを通して、長期的視点でとらえた大学におけるアウトリーチ実践の指導方法や実践プログラム構築の基盤をつくることができると考えられる。</p> <p>2. 研究の内容と方法</p> <p>本研究では、3名の大学教員と8名の大学院1年生(適宜院2年生を含む)による実践現場に即したアウトリーチコンサート企画・運営と年間プログラムの構築を中心的課題とし、教員のアクションリサーチを通して①教員の支援のあり方、②アウトリーチの実践を通じて育つ音楽教育実践力、③年間実践プログラムの実証と課題について検討する。これらの研究を進めるにあたっては、基礎調査としての日本及び海外のアウトリーチ活動に関する文書収集、アウトリーチ活動の実践記録の質的研究法による分析、学生に対するアンケート及び聴き取り調査の実施と分析を研究方法とする。</p> <p>音楽系のアウトリーチ活動は、斎藤によれば大きく「鑑賞系」「創造系」「技術指導系」の3つに分類され、さらにそれぞれ「鑑賞型・参加型」「参加型・協創型」「合唱型・器楽型・我が国の伝統音楽型」の下位項目に分けられる(斎藤, 2013)。本研究では、これらのうち「鑑賞系」の「鑑賞型」を軸として、具体的な内容を学生に企画させる。また、本研究では1年間を研究対象期間として、3名の教員の大学院授業内にアウトリーチに関する講義・演習時間を組み込みながら、教育現場における音楽学習の実態把握、及びアウトリーチコンサートの観察と演奏プログラムの作成、小学校での実践を行うこととする。</p> <p>3. 研究成果</p> <p>(1) 教員の具体的な支援内容と改善課題</p> <p>1年間のアウトリーチ実践における本学3名の教員の支援は、①実施校との連絡、②授業内でのアウトリーチに関する講義・演習、学生による学校現場の実態把握の支援、③実際のアウトリーチ活動の見学補助と振り返り、④演奏プログラム作成及びリハーサル時の学生への助言、⑤実際の演奏、その他として活動に必要なレンタカーなどの手配及び送迎にまとめられる。</p> <p>①実践校との連絡</p> <p>前期中に宗像地区の小学校現場にアウトリーチ実践の希望を募り、3校決定を行った。さらに、実施校に出向き、学校の規模や演奏場所の特徴、対象学年と実践内容の要望の聴き取りを行った。それを授業内で学生に伝え、</p>			

演奏プログラム作成の視点の一つとさせた。

### ②授業内でのアウトリーチに関する講義・演習、及び学生による学校現場の実態把握の支援

教育現場に対応できる学生の演奏プログラムの構成力を育てること、及び楽曲を児童生徒に説明する際にわかりやすく伝えるための音楽的な言葉を習得することを狙いとして、大学院の授業内で、アウトリーチの意義や現在の活動状況の概要等を学習するとともに、小学校音楽科教科書の分析を前期の授業内で実施した。特に、学習指導要領の〔共通事項〕に含まれる音楽用語や鑑賞領域の学習内容に焦点を当てた。また、附属小・中学校の授業を実際に見学させ、児童生徒の生活態度や授業過程で教師の児童生徒に対するコミュニケーションの取り方を理解させた。

### ③実際のアウトリーチ活動の見学補助と振り返り

公益財団法人宗像ユリックス主催（平成27年4月から本学と協定を締結）の「いきいき出前コンサート」に出演しているプロの演奏家の「音楽アウトリーチ」を対象として、計3回の実地見学を行った。これについてはプロの演奏家の演奏力を体感するとともに、プログラム全体の進め方や児童生徒とのコミュニケーションの取り方、曲間に話す内容などに留意して見学させ、本番終了後には実際に演奏者との質疑応答を行った。

### ④演奏プログラム及びリハーサル時の学生への助言

演奏プログラム作成及びリハーサルでの助言については、主に授業内で行った。その手順は、「担当教員の授業の枠の中（3回程度）でプログラム作成を学生一人一人に課す→各学生が作成したプログラムを授業で発表→発表されたプログラムを基に実際に学校現場に対応できるプログラムを3パターン作成→プログラム決定後、各自、譜読み及びMC原稿を作成→各本番に至るまでに1、2回のリハーサルを実施し、主に曲目説明等のMCの内容と読み方について助言」である（注：リハーサルは学生が授業外で複数回行った）。

### ⑤教員による実際の演奏

学生からの依頼を受け、プログラム内容の充実を図るために教員が演奏で実際に参加した。

これらの教師の支援内容から明らかになった改善課題のうち、4点を以下に示す。

- ・授業が各教員の担当時間内に組み込んだため、系統づけた学習やPDCAサイクルを行うことが困難であった。実践的演習の授業として連続性を図る必要がある。
- ・実施校への連絡は、ほとんどの場合教員が行ったため、演奏場所や児童生徒の雰囲気への把握は写真や伝言のみとなった。学生の意識づけや意欲向上、責任感向上のためには、学生とともに連絡及び訪問を行う必要があると思われる。
- ・音楽科教育の学習内容とアウトリーチでの演奏曲とをどのように関連付けているのか、あるいは教科内容とは関連付けずに他の視点からプログラム作成を行うのかを、各回に応じて明確に共有しておく必要がある。
- ・教育現場の観察により、児童とのコミュニケーションの取り方や児童に対する話し方などは参考になったものの、実際のMCでは個々の能力によるところが大きかったため、演奏技術だけでなくMCに対する指導をさらに行っていく必要がある。

## （2）各コンサートの概要とこれらを通じて育つ学生の音楽教育実践力

①前期期間の平成26年7月15日（火）福津市立勝浦小学校体育館にて実施。出演者：大学院1年生7名、院2年生1名（芸術課程音楽コース）。

学生には学校側から「全学年対象、演奏時間35分構成、楽しそうなコンサート名にしてほしいこと、演奏場所は体育館の床、控え場所は子どもたちの前、親しみやすい曲構成、MCを入れてほしい」という学校現場の特徴と要望を伝えた。表1は、これらを踏まえて学生が作成した演奏プログラムである。

表1：コンサート名 サマーコンサートIn勝浦小～音のピクニック～

1. チャルダッシュ（ヴァイオリンとピアノ）Cモンティ作曲
  2. Under the Sea（2本のヴァイオリン及びピアノ）
  3. 花（テノール独唱 ピアノ）瀧廉太郎作曲
  4. O Sole mio（テノール独唱 ピアノ）ナポリ民謡
  5. 子犬のワルツ（ピアノ）ショパン作曲
  6. 動物の謝肉祭（連弾）サン＝サーンス作曲
- ・ライオンの行進 めんどりとおんどり、ラバ、フィナーレ  
アンコール：（児童と一緒にくさんぽを斉唱）

②後期期間第1回目：平成26年11月6日（木）福津市立津屋崎小学校体育館で実施。出演者は大学院1年生7名、院2年生2名（芸術課程音楽コース）、教員2名。

対象学年の要望が1年生・2年生及び3年生・5年生このためプログラムを2パターン準備した。

この小学校には、出演した院2年生の学生が非常勤講師として務めていたため、教員ではなくこの学生が学校

とのやりとりを行った。表2は3年生及び5年生に対して行ったプログラムBの内容である。

③平成26年12月18日(木)宗像市立南郷小学校音楽教室で実施。出演者：大学院1年生8名と院2年生2名、教員1名。

対象学年は1年生及び2年生・3年生であったため、今回も2パターンのプログラムを準備した。学校現場からは、教科書内容との関連性を意識したプログラム構成と、華やかな舞台衣装で演奏することが要望として示された。表3は1年生に対して行ったプログラムAの内容である。

④これらの実践に対する学生の意見

第1回目の実践が終わった後、学生に聴き取り調査を行った結果、アウトリーチコンサートに関する反省とアイデアとして児童とのかかわり方、鑑賞空間の設定、MCに関するものが多く挙げられた。

児童との関わり方については、楽器に触ったり質問を受けたりする時間の設定や移動しながら演奏するとよいのではないかな等、鑑賞空間の設定については、演奏者との距離や、聴く体勢を変えてみてはどうかという案が出された。MCについては反省点が多く指摘され、「伝えたいことをはっきり伝える。ざっくりした問いかけではなく、明確に」といったことや「もっと演奏者が呼びかける」等、積極的な働きかけが必要であることを感じていたことが聴き取れた。

また、3つの音楽アウトリーチ活動を終えた後に行なったアンケート調査では、以下のような成果と課題に関する意見が示された。

- ・間合い、反応、集中力等、実際にその場でやってはじめてわかるが多かった。
- ・他の人のMCや演奏を見ることで、その場で自分の参考にすることができた。
- ・どうしたらお客さんが楽しめる(ためになる)プログラムになるかを考える事は、こういう機会が無い限り、経験することができずいい勉強になった。
- ・面白いと子どもの反応が違うので、演奏者は常に本気で取り組むことが大切。
- ・練習不足。出演者内での話し合いや、それ以外の人からの意見の見直しが必要。
- ・MCの語り方が堅い感じがした。演奏を「こなしている」という印象があった。
- ・各楽器の魅力子どもたちがじっくり感じることでできないまま終わってしまったのではないかな。

課題解決に対する手立てとしては、以下のような意見が示された。

- ・意識や使命感を持って演奏に臨むこと。参加学生各自がアーティストとしての自覚を持って、最高の演奏を届けるんだ!との強い想いを持つ。
- ・参加メンバーとの連携の強化。
- ・演奏コンセプトや目的の明確化。
- ・学校現場のこどもたちの実態の把握。
- ・参加学生自身が他団体の公演を鑑賞する。
- ・次からも演奏に呼ばれるようなシステムを作る。HPなどで告知する。

これらの意見からは、学生たちがプログラムやMCで話す内容等を構成する際に、聴き手の特徴を踏まえることの重要性を感じとった様子や、他者の実践を観察することが自分の実践を省察する視点づくりになっていたことが読み取れる。また、通常の演奏活動とは異なり、活動の趣旨や意義を大切に演奏に臨む必要があることを認識した様子が伺える。さらに、1つのコンサートの内容の充実に対して意欲的な意見が見られたと同時に、アウトリーチ活動を今後継続的に行うという視点からみた課題が提示されており、短期的・長期的な企画力の必要性を感じていることが読み取れる。

これらのことから、他の学生と共にこのアウトリーチ活動が、学生たちにとって、演奏力だけでなく聴き手に対するコミュニケーション力やコンサートの演出力、また自らの実践を振り返る省察力を育成する上で、

表2 プログラムB (対象学年3・5年生) 40分程度

1. チャルダッシュ (ヴァイオリン ピアノ) Cモンティ作曲
2. 動物の謝肉祭 より《象》(コントラバス ピアノ) サン＝サーンス 作曲
3. ゴリウオークのケーキウォーク (ピアノ) ドビュッシー作曲
4. ふるさと (テノール及びバリトンとピアノ) 岡野貞一 作曲
5. まちぼうけ (バリトン独唱 ピアノ) 山田耕筰作曲
6. チャイコフスキー作曲「くるみ割り人形」より (ヴァイオリン3挺 フルート、コントラバス、ピアノ)  
・行進曲・葦笛の踊り・トレパーク
7. アンコールとして校歌斉唱

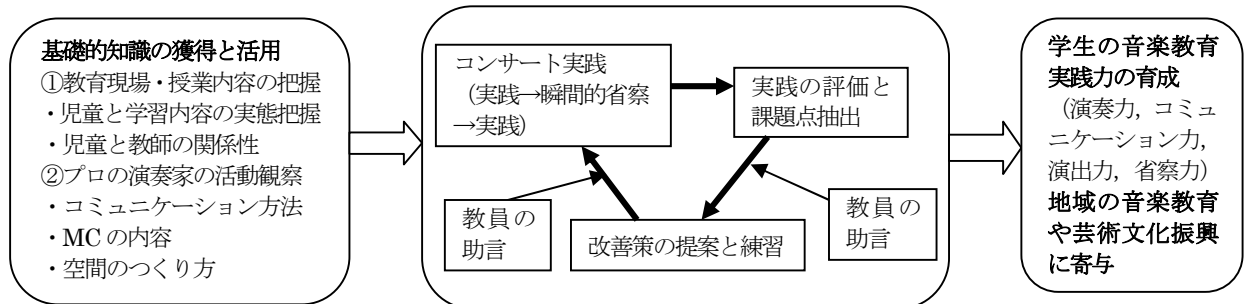
表3 プログラムA (対象学年1年生) 35分

1. チャイコフスキー作曲「くるみ割り人形」より (連弾・行進曲・トレパーク)
2. (ソプラノ独唱 ピアノ) たき火 渡辺茂 作曲  
唄 山田耕筰 作曲
3. フィドルファドル (ヴァイオリン3本 ピアノ) アンダーソン作曲
4. 歌の翼よる幻想曲 (フルート ピアノ) シュテックメスト 作曲
5. ふるさと (全員合唱) 岡野貞一 作曲

有意義な活動であったことが指摘できる。

### (3) 年間実践プログラムの実証と課題

本研究によって、以下のような1年間を通じた大学におけるアウトリーチ実践プログラムが実証された。



音楽アウトリーチ活動を行った3つの学校からは、また来年も実践してほしいという要望を受けた。実際に生の素材や音に触れて五感を活性化させることが高い教育的効果を生み出すことは、周知の事実である。このように、教員養成大学としての本学の実践教育と地域での音楽活動を関連させた音楽教育実践を行うことは、大学と学校教育現場双方にとって有意義な互恵関係を構築する第一歩となったと思われる。

しかし、年間プログラムを実証する中で、1年間での大学院1年生全員に対する実践経験の確保、実践において教員が関わる範囲の明確化、時間的制約を踏まえた大学院の授業内容への導入といった課題が残った。その解決のためには、各教員の連携と学習内容の精選をさらに実施し、長期的な視点で学生の実践力の育成を見据える必要がある。

さらに、学校音楽教育現場の多様なニーズに対応するために、「鑑賞型」の演奏プログラムの充実を図るとともに、大学と学校現場が積極的に交流し、聴き手が活動に加わる「参加型」演奏プログラムや、参加者と実践者が共に音楽を楽しむ合う「創造型」の演奏プログラムを行う環境作りが必要である。

### 4. 今後予想される研究成果と研究の展望

今後は、さらに地域の音楽芸術活動及び音楽教育の担い手を養成するための、大学におけるアウトリーチ実践に関する実践的研究を継続していく必要がある。平成27年度は、アウトリーチ活動の実践の場として、宗像ユリックスが主催している音楽アウトリーチ「いきいき出前コンサート」の活動枠の一部提供を受け、宗像市内の小学校及び介護関係施設を訪問することが決まっている。また、これらの実践とともに大学独自のアウトリーチの実践の実績を重ねる予定である。

さらに、本研究で実証したアウトリーチ実践研究の年間プログラム、及び今回の活動で得られたデータをさらに整理・分析し、音楽アウトリーチの活動が、これからの地域の音楽教育や芸術文化振興の活性化に有意義に機能するものであるということについての実証的検討を進め、科研の獲得へとつなげていきたいと考えている。

### 5. 主な学会発表及び論文等

平成26年度 日本音楽教育学会九州地区例会 平成27年2月28日(土) 福岡教育大学音楽教棟音楽1番教室において口頭発表を行なった。

発表題目：「音楽アウトリーチ活動の実際と展望 —福岡県宗像地区での実践を通して—」

### 【参考文献】

齊藤 豊 (2013) 「音楽の授業におけるアウトリーチ活動の展開」『音楽教育実践ジャーナル』vol.10 no.2 , p.77。

○本報告書は、本学ホームページを通じて学内外に公開いたします。

○本経費により作成された成果物や資料等については、必ず全て添付願います。